

アカデミックフェス 事後レポート

企画名：「知」のリブランディング

—人工知能時代の「人知」と「身体」、そして大学の意味を考える—

企画名（英語）：Rebranding of Wisdom: New Roles of “Human Knowledge”, “Body”, and the “University” in the Artificial Intelligence Era

時 間：11:20-12:20

会 場：アカデミーコモン 3F メインステージ

登壇者：宇野常寛（評論家／批評誌〈PLANETS〉編集長）

土屋恵一郎（法学者・演劇評論家／明治大学学長・法学部教授）

司会：門脇耕三（建築家・建築学者／明治大学出版会編集委員長・理工学部専任講師）

開催概要：

2017年度からの継続イベントとして、現代における「知」のありかたを議論した。2018年度は、計算機が「知」を実装しつつあるように見える現在の状況を踏まえながら、知の生産主体としての人間の「身体」の意味を考える。また、「知」のあり方が変わりつつある現在、大学というプラットフォームはどのような役割を担うべきか、議論を行う。

開催概要（英語）：

As a continuation event from last year, we discussed on “wisdom” in the present days.

In this year, we thought about the meaning of “human body” as a producer of wisdom, based on the current situation that computers seems to be implementing wisdom. Also, as the way of “wisdom” has been changing, we discussed what role the university should play.

開催内容：

宇野常寛氏と土屋恵一郎学長の対談形式により、情報技術の発展をどのように捉えるべきか、現在起こりつつあるパラダイム変化はどのようなものか、IoT等によって情報機器や計算機が環境化する社会において、身体を持つ知的ユニットである「人間」はどのような意義を持つか、われわれはどのように学ぶべきか、こうした社会における大学の新たな役割とは何か、などといったトピックについて議論を行った。

議論の結果、これまでは分野ごとに蓄積されていたさまざまな知の体系が、イ

インターネットをはじめとする情報技術によって接続され、相対化された結果、規範としての役割を失っているのが現在の状況であるとの見解が示された。現在は知的権威が崩壊している状況であると言い換えることもできるが、こうした状況を知的に漂流する主体には、新たな身体感覚が求められつつあるとの見解も得られた。すなわち、知の激流のなかでもがきつつも、自身の身体を少し離れた場所から俯瞰するような身体感覚である。これは臨死体験における体外離脱にたとえられる感覚であるが、同時に GIS で常に位置情報をナビゲートされている現在の空間体験とも相同である。

また、こうした状況における大学の役割についても議論が行われ、雑誌メディア等が衰退しつつある現在、知の集積体としての大学はプレゼンスを向上させ、その役割は特に地方都市等で重要になるとの見解が示された。都心の大学のキャンパスについては、知の集積の熱気を実空間上に放つ「場所」としての役割が重要になるとの意見もあった。

以 上